

天保十一年庚子四月九日を以て生る。父重敬、其比能書家の聞えあり。滝野、幼より学問及書を好み、四才より書を書きたり。家塾を開きて子弟を教育す。八、九才之比より教授の手伝をする。十二歳より画を学ひ、楚山、東山ニ付て研究する事十七歳迄。日課ハ、朝より午後八ツ時迄子弟を教授して、かたはら画事、漢字、和歌を研究す。

跡見花蹊、名ハ滝野、又木花、西成と号す。天保十一年四月九日生る。撰津西成郡木津村に生る。父を跡見重敬、母を幾野と云ふ。其祖先、天種子命より出、用明天皇の臣たりしか、聖徳太子に仕へて河内に来り、物部守屋大臣討伐之後、木津に来り、家世々郷士たり。その家名を永続せしめん為、天台宗に属する唯専寺といふを木津に建立せり。後、真宗大谷派に属し、今なほ跡見御坊として存在し居る。幕政の頃、大庄屋として久しく一郷に重せらる。祖父歿後、親族預り庄屋を勤めける程に、某の邪なるより、遂に株を横領せられたり。跡見の家ハ殊に少なからぬ困難に陥り、僅に寺小屋的家塾を開き、近郷の子弟に読書、習字等を教へて生計を立てるに至れり。実にかゝる時代に、姉藤野後千代滝と云、花蹊ハ次女として、生る。一、二歳の頃よりも手遊び物などハ欲しがらぬ風て、只書を見せれハ悦んで泣き止むと云。四歳より書を学ひ、父母も珍らしとて日々喜んで教へられたり。読書も孝経、三字経習ひ覚へて、六歳の時、母の実家の祖母死去の節、葬式に行て、帰りハ父に負はれて、脊中にて孝経を暗誦して、父も始めて驚たり。此時より両親ハ、此子を以、跡見の家を再興させる也とて、よく我に聞かせたり。汝、わか家を興すへき人物なれ、されハ女ながらも他に嫁せずして、わか家を継がしむへしな

と、花蹊幼少より他に嫁せずしてわか家を興すへき義務を自覚し、ひたすら技芸の修養に熱心なり。当時ハ花蹊の弟三之助、後重威と云、生れ、三女菊野、四女政野、この両女ハ早世、二男元之助後愛四郎生れ、花蹊ハ姉と共に両親を助けて、漢書の素読、習字をしへ、この妹なと脊に負ながら、御飯たき、其外はき掃除、すへてをいたして、自分の修養ハ夜のみ、花蹊もとより画も好みて、画の修養を親にたのみて、
(次へ続ク)

*寺小屋的(寺子屋的) *をしへ(教へ)

嘉永二年

十二歳の時 石垣東山先生 先生ハ上町北新町二丁目に住也 の門に入る。先生も悦んで稽古日毎に扇子を沢山に書をかゝせて、大いにほこられたり。また、天王寺楨野楚山先生につきて画を学び、此当時ハもはや屏風、襖など揮毫ものにて多忙を究む。また母の云、女ハ裁縫が出来なくては不自由なりとて、縫物の稽古に行く。是も外に修行も有りて縫物ハ半日つゝ稽古に行く。
*嘉永二年(嘉永四年)

安政年間

十七歳、始て京師に出て、漢学、絵画を学ぶ。
二年にて帰坂す。

安政元年

十七歳の時、京都に遊学を思ひたち、宮原節庵謙蔵先生に漢学、詩文、書法を学び、画を円山応立、中島来章に学ひて、約二年の後、京都を去つてより、父と共に大坂中之嶋に居を下し、後藤松蔭先生に漢学、詩文を学ひつゝ、修行中、豪富の子女依頼によりて、自から家塾を為すに

至りぬ。この子女を教育して、方々の依頼の画

を研究す。毎夜寐に就くは四更、五更、或ハ夜

の明る迄。此時分の大坂の形勢、幕政の盛なる

時分にて、富豪家ハ諸大名の金の御用を勤め、

毎日の様に蔵屋敷よりも、又御立入の町人より

も、**賑舞**と云て、北の河佐、平辰、綿富とか、

新町の織屋、高島屋と云大茶屋にて、昼早々よ

りハ席書画を致して、夕景より芸妓の踊とか大

酒宴に成ると云、是ハ盛なるもの也。町人ハ是

か業の様なものにて、今日は長州様、明日ハ加

州様、芸州様とか、町人ハ**鴻地**、広岡、平瀬其

外にて、珍らしき事ハ仕尽したり。

*安政元年（安政三年） *賑舞（振舞）

*鴻地（鴻池）

安政四年巳年

父重敬、元より勤王の志厚くして姉小路公知卿

に仕へる。雑掌役を仰付られる。

安政三年之比

父ハ勤王家にて、京師ニ出て姉小路公知卿に召

仕へらる。雑掌役を仰付らる。

（文久二年十月十一日参照）

幕府え勅使三条公、副使姉小路公、関東二使さ

れ候節、目附役として御供仰付られ、**大儀明分**

を正されたり。舎弟重威も同様御供す。

（文久三年四月二十三日参照）

其以前、撰河泉台場堤防之御巡見之御勅使とし

て姉小路公御出発、**其切**も父雑掌役として御供

す。

*安政三（ママ）年 *大儀明分（大義名分）

*其切（其節）

安政六年

頼三樹斬せらる。

安政六年未

(安政七年) 三月三日

井伊直弼、水戸藩士の為に刺れたり。

(安政七年) 三月三日

桜田門外紅雪飛び、井伊直弼戮せられ

万延元年

万延元年 庚申にして畢。

花蹊、大坂中之嶋二宅を構えたり。此時、富豪
家娘たち教育を頼まれ、私塾を開き、漢字、書
画を教授す。

(万延元年) 十二月十三日より

子弟に試筆之稽古する。毎年是を例とす。

万延、文久頃より

形勢騒然となり、米国人当地へ来る。

文久元年五月十日、翌十一日の二日

大川へ船にて来る。騒かしき事也。

文久元年八月六日

(文久元年) 八月六日

京師姉小路家より書至、今般和宮様將軍家へ御
降家二付、御供之義申来る。父母共相談して考
たり。是ハ伏原大納言よりの御進めニ候処、公
知卿ハ和宮様の御一方の花よりも世界の花とな
れと仰せられて、直に御断申上る。陛下、加茂
行幸仰せ出されたり。国事掛日下玄瑞、武市半
平太、照旗烈三郎之有士と交る。

京都姉小路様より文参り、伏原様よりの仰せに
て、和宮様將軍家へ御降嫁二付、御供申上へき
様との事にて、両親はしめ親戚にも相談する。
此時節にハ実には一大出世とて皆々悦び居たり。
又、姉小路様より文参りて、和宮様の花よりも
世界の花とならむ事を望む、よつて此度ハ止む
へしと仰せられて、早速御断りす。

*御降家(御降嫁) *御供之義(御供之儀)

(文久元年) 十月三日

和宮様、祇園え御首途、糸毛御車三台並ひて牛
の引たる御行列拝見す。実に有かたき事也。

(文久元年) 十月三日

和宮様祇園社へ御首途拝見に上京す。御所車糸
毛の御車、外二、三台続ての御行列、実に結構

言ん方なし。

文久元年辛酉十月廿日

和宮様京師御出興、江戸に成らせられる。擲上

迄御奉送申上る。

*擲上(蹴上)

文久元年十月十一日

姉小路公知卿、関東御副使として御下向ニ付、

父重敬を目附役となし、男重威を用人と仰付らる。

文久二年壬戌十月十二日

三条実美卿正使、姉小路公知卿副使として、関

東に赴せらる。父重敬、弟重威、御供仰付られ

*文久元年(文久二年)

*十二日(十一日)

文久二年正月五日

松囃子、弟子たちを呼て、試筆の書画を展観す。

是を例とす。発会式也。

*文久二年(文久三年)

(文久三年) 正月六日より

上京す。姉小路家に参加。滞留する。当時世の中騒然たり。

文久三年(三月四日)

將軍上洛アリ。大坂城に御滞在中、城中にて薨

去なる。

(文久三年三月十一日)

聖上、攘夷御祈願の為、賀茂両社に行幸アリ。將軍供奉仰付られる。

(文久三年四月十一日)

陛下、八幡行幸在らせられ拝見す。

(文久三年) 四月十一日

聖上、八幡行幸あらせられ、おのれも拝見に出る。

(文久三年) 四月廿一日

姉小路卿勅使として撰河泉之台場隄防御巡見之節、跡見重敬及惇重威、御供仰付らる。

姉小路公知卿、撰河泉海岸防備巡視を仰付られる。父、舎弟も御供仰付られる。

当時將軍御上洛、大坂城御滞在。

*四月廿二日(四月廿三日)

(文久三年) 五月廿一日

姉小路卿御所御退出之砌、朔平御門にて刺客之為被害。此御知らせにて、花蹊之かなしみ、実国家之為泣涕限りなし。生涯之かなしみ也。是より天下之乱となる。

(文久三年) 五月廿日夜

姉小路少將殿、朔平御門にて賊刃に斃る。此事件、父よりの書状を見て、実に其驚、言語に尽しかたし。母にも此事申聞せて、号泣する事良久し。直に舎弟愛四郎と下僕を連て、夜船にて上京す。

*五月廿一日(五月廿日)

(文久三年五月) 廿九日

御送葬も済せられて、(六月朔日へ続く)

(文久三年) 六月朔日

帰坂す。

(文久三年) 八月十九日

京都大變三付、此夜門前三度之早打通る。

(文久三年) 八月十九日

京都大變を聞、已に上京のつもりに候処、京師の町へ通行留にて、とても行事出来ぬ次第にて止る。

(文久三年八月) 廿日

京都之大變を聞て、花蹊、元之助連て上京之筈、京都へ通行留、雜人ハ一人も通さぬ事に相成、

無抛止。

(文久三年八月) 廿二日

京都姉小路より文来、十八日暁之大変、実に朝廷之御事、涙落る雨の如し。

(文久三年八月) 廿五日

姉小路卿 (空百) 難之節、忠節を尽したる中条右京、今日より長州え下向之由、暇乞ニ来る。

(文久三年八月) 廿七日

中山侍従、大和に儀兵を揚られたるに付、尼ヶ崎之軍勢甲冑にてエイヤ〜にて、大和え出立す。大江橋を渡ル。

*儀兵(義兵)

(文久三年) 九月七日

花蹊の従弟吉井巖義、昨六日穿儀之筋にて召取られ、役人之前にて切腹す。急報来る。

右巖之舎弟儀蔵義、中山卿之御身替りに立て戦死す。

*吉井巖義(吉井巖儀) *穿儀(詮議)

*儀蔵義(儀蔵儀)

(文久三年九月) 十四日

加州軍、狭山えくり出し、実に戦国の如し。

(文久三年) 十月十八日

天満与力卯野善三郎来り、今般但馬幾野銀山ニ浪士立籠り、大将ハ**沢水主守**殿、改名して姉小路五郎丸と云、右之人相を写しくれと申依頼にて、花蹊大ゐに立腹、叱り付、国家之正義者を何と思ふと云。早々帰り候。

* 沢水主守 (沢水主)

(文久三年) 十月十八日、天満同心卯野氏来る。

今般、但馬銀山ニ義兵を起したる大将**沢水主守**殿、姉小路五郎丸殿、の人相を、君ハ知らるゝ**なるは**肖像を書きくれと申され、おのれ某にのゝしつて云、此度義兵を起されたるハ国家の為也、何とて其御肖像を写すへきやとしかり付たれハ、大に閉口して歸りたり。

* 沢水主守 (沢水正) *なるは (ならば)

(文久三年) 十一月六日

和宮様ニ進られ物、御内儀より、絹本三十枚人物花鳥山水等仰付らる。

(文久三年) 十二月廿日

木津より使来、今度彦根藩士二千五百人来り、願泉寺、唯専寺、わか本宅えも七十人宿かりに来り、下宿ス。

(文久三年十二月) 廿七日

和宮様ニ進せられ物、**委**皆揮毫、京師え出す。

* 委 (悉)

文久三年甲子正月

* 文久三年 (文久四年)

元治元年甲子

(文久四年一月) 五日

松籙子、子弟之書初展観して、終日賑々敷、発会済。

(文久四年一月) 六日

夜船にて上京す。例の如し。姉小路家え着。

(文久四年一月) 十日より滞在中

姉小路千重丸様、良子様、御読書、習字、御教授申上る。

(文久四年一月) 廿四日

帰坂す。

(元治元年二月) 廿四日

下大和橋に伊勢屋平兵衛之梟首、北浜雁金やにて切殺すと云。

(元治元年二月) 廿六日

難波御堂前前に梟首、及二人切腹す。

(元治元年) 六月廿三日

長州藩士大勢上京す。

(元治元年) 七月十九日

京師大変、三条公始七卿落、大坂動乱、景勢益

危。

(元治元年) 七月十九日

浪花城中よりノロセ上り、京師大変、正午より京師大火、非常なる騒動にて、夕刻益甚

しく、徹夜する。上町辺より荷物方々えはこひ出し、門前大困雜也。此時、正義家三条様御は

成、倉屋敷ブチコハシ候。正義家の噂あしきを聞、歎息の外無之、生甲斐なく只涙のみ也。

*ノロセ(狼煙) *大困雜(大混雜)

(元治元年) 十月十九日

土さん加々さん会津はいやよ

会津いなしてよい毛利よんてくれ [図]

(元治元年十月) 十九日

後藤松蔭先生死去。

元治

宮原先生娘竹の、谷場卿娘かくの、富小路信丸、
読書、書画の入門あり。

文久四年乙丑正月

*文久四年(元治二年)

慶応元年

(慶応元年) 七月七日

七夕祭りにて、生徒を呼て遊ぶ。躍を催す。毎
年例とす。

(慶応元年) 九月廿日

京都蓮観院、孝格天皇様の御局より、花蹊の母
幾野ハ木津に壱人、花蹊ハ中之嶋に一人住居、
景勢危驗之世中故、両家とも仕舞、京都ニ住居
する様、懇々の仰にて候へ共、母は、跡見の家
ハ聖徳太子より打続きたる家なれハ、京都え引
越事ハ家に対しても出来かたく申はられ、段々
と説諭す。

(慶応元年) 九月廿日

京師蓮観院様よりの仰にて、当今の形勢にてハ、
花蹊、其母幾野の女のみにてハ不安心故、木津
中之嶋の両家かた付、京都え転住する様とて懇
ニ仰せられ、母様ハ此木津の地を離れかたくと
申され候へとも、大いにすゝめて家をかた付
京都に移住す。

*孝格天皇(光格天皇)

*危驗(危陰)

*申はられ(申張られ)

(慶応元年) 九月廿二日

大川筋えバツテラにて異人九人来、天満橋より跡え引帰る。

*廿二日(廿三日) *跡(後)

(慶応元年九月) 廿四日

此前より、家材道具かた付、前の船に積て京師へ出す。是迄教育したる子弟に別るゝ事、実に子弟之なげき、慈母に離るゝ如く、泣の涙にて漸別れゆく。当時門人五十八名。先、姉小路冢え着。

(慶応元年) 十月八日

漸々世間騒々敷二付、千重丸様、良姫様、岩倉御別荘え御立のきに相成。

*八日(九日)

(慶応元年) 十一月九日

幕府より守護職附武家杉山栄娘輝女、画の入門、今の奥村晴翠也。

花蹊上京以来、諸堂上方より御襖、御屏風、或衝立など、続々画の御依頼ありて、多忙を究む。

*奥村晴翠(奥原晴翠)

慶応元年丙寅正月二日

御書初の御式あり。

*慶応元年(慶応二年)

(慶応二年) 三月十五日

慶応二年

千重丸様、准后様え御見子惜みに御参り有て、其節花蹊御供す。准后様皇大皇、親王様陛下御側にて御席書被遊、御褒美として結構なる御品々拝領、千重丸様御七歳之時也。

(慶応二年) 三月廿一日

千重丸様、御用召ニテ御参内。先帝御前にて御席書沢山ニ被遊、御褒美拝領物沢山にて、実に珍らしき事、花蹊も御供す。当時世間は大評判なり。

(慶応二年三月) 廿七日

千重丸様、元服仰付らる。元服式ハ一代の大典にて、宗家三条様御西下ニテ、正親町三条加冠、阿野御着座、風早離髮、三条西、沢三位附添。御式拝見す。

*離髮(理髮)

(慶応二年) 三月廿七日

姉小路千重丸殿御元服、正親町三条加冠、風早公記離髮。

聖上光明御違例様にて、日々御命乞。

*離髮(理髮) *光明(孝明)

(慶応二年) 九月三日

岡崎香川景嗣之家を借り候事に約定す。花蹊、岡崎に住居す。此時より東洞院瓦町ニ新宅建築す。

(慶応二年) 十二月に相成候てより

禁中様御大病にかゝらせられ、御疱瘡と申事にて、姉小路公義朝臣ハ日吉荒神え日参、御命乞被遊、花蹊も日参す。

(慶応二年十二月) 廿五日

(慶応二年) 十二月廿五日

禁中様御崩御あらせられ、是ハ極々御内々にて、さてこのなげき日本国家のなげき、是迄陛下の国家に御心なやまされたる事、御年御三十歳にて、親王様ハ御十五歳様にて、日本の御国体如何に成行候や、涙も尽たるかなしみ也。

故姉小路公知卿被害て後の天下景勢如斯、勤王ノ士ハ禁門に入れず。

陛下の御身に御あやうき事度々、献毒もありたれと御まぬかれ被遊、この御疮瘡も如何なる御事にや、なげきのみ御世哉。

*なげき(歎き) *なげき(歎き) *なげき(歎き)

慶応二年丁卯正月

すへて御祝等廃されたり。

*慶応二年(慶応三年)

(慶応三年) 正月廿七日

陛下御葬送、人民之泣声のみ。拝送申上る。

(慶応三年) 二月十一日

東洞院新築落製にて移転す。

* (慶応三年) 二月十一日 (慶応二年十二月二十九日)

(慶応三年) 三月朔日

母を木津より呼迎え、皆々伏見迄迎ひに行。

(慶応三年三月) 十六日

愈御崩御あらせらる。天色日の色真黄にて日の

色とも見えず、実に一世のかなしみ、いまた御発表ニは不相成候。是迄国事に御震襟をなやませられたれと、一として思召通りに参らす、歎息限りなく候。

此頃、予の家を東洞院二条に新築中ニテ、大工職人に命して大いそかせ、御発表迄にとて漸廿九日大晦日先々移転いたし候。此日、崩御御発表に相成候。

*御震襟(御宸襟)

慶応三年丁卯

(慶応三年一月) 元日

御祝等一切なく、常よりも猶淋しく、(二月廿七日へ続く)

(慶応三年一月) 廿七日

御送葬奉送申上候。雪もちら／＼ふりたり。かなしさいやまさり候。

高畑式部女、画の入門す。

九条公より御後室ニ御稽古御頼みに相成、芹田氏御使にて宮原先生え御依頼ニ相成、先生云、花蹊ハ師の礼を以てなれば御請をするが、さなくは御請は致しませぬと申上られたり。故に師の礼にて御稽古申上る事に相成、二、五、八の御稽古日とす。当時関白様の勢力は大なるもの也。

花蹊ハ、毎日宮原先生ニ漢籍、詩文、及書を学ふかたはら、堂上方え御稽古に参り、書画の御依頼物に忙し。

(慶応三年) 五月朔日

正義家なる対州藩士青木建右衛門、忝当右衛門を連れて入門、読書、習字。

(慶応三年五月) 七日

九条殿より御使来る。田中勇蔵と申御手医師宮原先生え御頼にて画の稽古に上る事ニ相成。九条幸経公御後室妙寿院様。

(慶応三年) 十二月比より

京都市中に神の御札ふり出し、近郷近在大坂も同じさはきにて、日々躍出し、何の兆か分らず。

(慶応三年) 十月、十一日比

諸神々の御札臨降にて、京洛中天地もくつかへる心地、神々の札のみならず、奈良の鹿もいくともなく来る

(慶応三年) 十二月九日

朝より大変起り、早速姉小路家えかけ付たるに、六門の警衛きひしく、夫より堺町御門薩州かた

(慶応三年) 十二月九日

御所大変起り、六門閉られ候由承り、早速、予姉小路御殿えかけ付ル。六門ハ警衛厳重、是迄

め、清和御門より入て参殿す。承る処、是迄逆賊たる摂家、伝奏、儀奏の参内被差止、今日に至て、長州落なる三条殿をはしめ、五卿御帰洛仰付られ、**正義**之時節と相成、また此嬉しき、躍上り、手の舞足の踏処をしらす。

*正義(正義)

の徳川、会藩、桑名の守護ハ引払と相成、長州五卿ハ御帰洛被命、正義相立時節到来いたし、躍上つて大悦、早速三条え帰り、母さまニ此由告て、共々に其喜ひ限りなし。是迄之悪姦役人、撰家、伝奏、儀奏、参内差止仰付らる。薩長土肥の固め厳重にて、六門内さなから戦争の如し。

(慶応三年十二月) 十日

会藩のかため引払、徳川、**会津**の、桑名、**事越**候哉と心痛致したれと、正義大藩警衛堅くして、大丈夫と云。

*会津(の(ママ)) *越(起)

(慶応三年十二月) 廿七日

早朝より父重敬、男典膳、民部同行にて、三条公御始五卿御帰洛二付、伏見迄御迎ひに行。此時、五卿の**御内参**ありて、其警衛の盛なる、いつの世にかと思ひたるに、今日此行列を拝見する嬉しき、五年間の久しき御正義も顕れて、感涙の外なく候。

*御内参(御参内)

(慶応三年十二月) 廿七日
朝、父様、舎弟民部同道にて、伏見迄三条様御迎ひに参る。御帰京直ニ御参内に相成候。此嬉しき譬ふるに物なし。五ヶ年間いつの事かと相待たるに、漸御帰洛に相成、安心々々、これぞ御維新に相成始め也。

慶応三年戊辰正月

慶応三戊辰正月元日

*慶応三年(慶応四年)

*慶応三(慶応四)

(慶応四年一月) 三日

伏見戦争、わか二条の住宅之門前、なま首を二ツもさげて通るやら、軍人之通行にて、向宮原迄も行けぬ位の人通り也。

(慶応四年一月) 三日

姉小路様、**寿邦院**様、良姫様成らせられ、御年始の宴を開く。此日、伏見大火、皆々様御帰殿相成。是伏見戦争也。

*寿邦院(寿部院)

(慶応四年一月) 四日

伏見戦争大勝利。会藩**残盗**、黒谷え**鉦げき**して、
兵火盛也。

*残盗(残党) *鉦げき(鉦げき)

(慶応四年一月) 四日

鉦声近く聞え、伏見鳥羽の戦争、長藩大勝利。
此時、予、母様と参殿いたし候。御上御一統、
其外家来一同御供して、岩倉御別荘え御立退に
相成。追々焼払火益甚。父様、舎弟典膳、民部
出征いたし候。

*鉦声(鉦声)

(慶応四年一月) 十一日

父重敬はしめ表役人たち、白精好陣羽織に、花
蹊、登り竜の画を揮毫したるを着て出陣す。

(慶応四年) 二月朔日

(慶応四年二月) 三日

今上帝、始而二条城え行幸、拝観、わか門前御
通過ニなる。

(慶応四年) 二月三日

二条城**大政官**に相成二付、御政事被聞召由、御
上明治、二条城え行幸あらせられる。予等奉迎
送致し候。

*大政官(太政官)

(慶応四年二月) 十五日

有栖川宮御東行也。

(慶応四年二月) 三十日

始て外国人の参内あり。**二条縄手**にて**刺客**に為
に切らる。即死一人、手おひの者九人。

*二条縄手(三条縄手) *刺客に(刺客の)

(慶応四年) 三月二十日

外国人始而参内す。三条縄手にて、林田某、外
人を切付、落馬致し候処、切殺たり。林田自殺
せんとする処、警衛の者林田の首かき切、直二

戎敵え差出したり。林田の辞世あり。

さきかけて散や大和の桜花

よしやうき世に名ハたゝすとも

*戎敵（戎狄）

（慶応四年）三月廿日

今上帝御親征、大坂行幸あらせられる。

*廿日（廿一日）

（慶応四年）三月廿一日

御上、大坂行幸在らせられる。三条永楽屋ニ奉送する。京師人民泣々御送り申上候。

（慶応四年）四月八日

今上帝、大坂より御還行相成たり。

*御還行（御還幸）

（慶応四年四月）十二日

宗対馬守様、姉小路家え御入在たり。

（慶応四年）八月廿七日

御上、御即位あらせらる。殿様参賀。

（明治元年）九月廿日

今上帝、東京行幸在らせられる。

（明治元年）九月廿日

御上、東京行幸御発輦ニテ、奉送申上る。

（明治元年九月）廿二日

長生節にて稽古を廃す。御祝義申上る。いまた

（明治元年九月）廿二日

御上御誕辰、長生節と云。

天長節の御称のなき時也。

*御祝義（御祝儀）

（明治元年）十月朔日

御築地内に大学寮出来、堂上の子弟、学問研究

所とす。

(明治元年) 十二月廿二日

御上、東京より御還行あらせられる。

*御還行(御還幸)

(明治元年) 十二月廿八日 雪

(明治元年十二月) 廿八日

女御様御入内、御婚儀在らせられる。日の御門迄拝観に参る。

女御様憲照御入代、予、拝見二日御門迄。此日、雪ふる。

*憲照(昭憲) *御入代(御入内)

明治元年己巳正月元日

明治二年己巳

*明治元年(明治二年)

(明治二年) 正月四日

父様還曆祝にて客招待す。

(明治二年) 正月五日

(明治二年一月) 五日

寺町革堂前にて横井平四郎首取られる。花蹊、沢様え御礼ニ参る途中ニ而、それに逢ふ。

昼下り、寺町革堂前にて横井平四郎首取られ、予、沢殿ニ御礼に参り候途中にて見る。

(明治二年) 三月十一日

母様北野天満宮え参詣せられて、桜も満開、夕景帰宅せられ、此時より風邪にて、是病氣のはしめと相成、日々寐たり起たりして快方に赴かず。医師も三、四人を迎へてな**診★**(言十察)をするも、是死病と云。五月中旬比と云。余等の驚き一方ならず。当人も今度ハとても全快六ツヶ敷、其覚悟をせよと申され、夫より日々に重く相成、(六月七日へ続く)

***診★**(言十察) (診察)

(明治二年) 四月六日より、

母様病氣にて種々看護いたし候処其功なく、

(六月七日へ続く)

(明治二年) 六月七日

遂に死去致され、一代のかなしみに逢ふ。

(明治二年) 六月七日

朝 病もよほど快よくとて悦ひたるに、八つ時より変来りて皆々呼二遣し、家内、父上、兄弟共、姉小路殿様、良姫様も成らせられ、皆々心静に暇乞して、称名諸共往生致されたり。実に一生涯のなげきの涙雨の如し。此時、暮六ツ時也。

(明治二年) 六月 九日

葬送、七条にて火葬致し、清浄華院二骨を納む。

(明治二年) 九月廿四日

中后様御東行をなげき、京師の人民御所御外郭を廻り、御千度致して御とまりを祈る。

(明治二年) 十月五日

中宮様、東京御発輦。涙ながら奉送す。洛中の人々東京行啓をなげき、夜な夜な御築地外二御千度いたし候甲斐もなく候。

明治二年

明治二年庚午正月元日

*明治二年 (明治三年)

(明治三年) 七月十二日

御所より御用召にて姉小路公義殿参内。此度東京え召れ候事にて、一同愁歎限りなし。

(明治三年) 七月

御所より御用召にて、東京え出向候事に相成。

(明治三年) 八月十一日 晴

姉小路殿、東京へ御出発。御供ハ重敬、民部、奥田のみ也。朝七ツ時御出門にて、皆々御別れを惜しみ、なげきかなしみ、涙千行万行。それより、残りし人々、御道中御安隠と、今一度御帰京を北野天満宮に祈り、日々御百度をうち居候。東京より花蹊に東行する様にと仰越され、其準備する。

*御安隠(御安穩)

(明治三年) 十一月より

九条様を御はしめ御弟子の御方々に東行之事申候えは、実に惜まれたれと愈、(十一月十七日へ続く)

(明治三年) 十一月十七日

朝七ツ時出立、沢浅野と同行にて、(十一月廿九日へ続く)

(明治三年十一月) 廿九日

品川着。父様ニ逢ひて嬉しなみたにくれたり。

(明治三年) 十二月

(明治三年十二月) 二日

三条様え参り、久々にて拝謁、種々御物語申上る。

三条様より御依頼の御襖四季花卉、揮毫にかゝる。また方々様より御たのみの揮毫ものにていそかし。

(明治三年十二月) 十八日

(明治三年) 八月十一日

姉小路殿西京出発、父様、舎弟民部、奥田、下部。予も御供の筈、準備出来かね、跡よりの事に相成。

*跡(後)

(明治三年) 十一月十七日

花蹊京師出発。東行す。十三日間ニ、(十一月廿九日へ続く)

(明治三年十一月) 廿九日

品川着、父様も迎ひに來られて、築地沢家に着

外務省より、絹本二京名所廿五枚仰付らる。日々揮毫す。

(明治三年十二月) 廿五日

沢様より御屏風一双松竹梅之図。東京着早々、福田の娘きみ御弟子入あり。揮毫もの夥しく、繁忙を究む。

*究む(極む)

明治四年辛未元日

明治四年辛未

(明治四年) 一月

当時東京の形勢、戦後と云ひ、実に令嬢とも云へき人ハ開化ととなへて、髪をザン切にして、長き書生羽織を着、エン筆を耳に挟みて、ヘコ帯などとして、実に殺風景を極む。予、この風体を見て、是を一変せねはと考ふ。女子教育の念甚し。

*エン筆(鉛筆)

(明治四年) 一月九日

広沢参議 暗殺されたり。

(明治四年一月) 十五日

朝廷より御用にて、絹本豎物四季花卉四枚、絹本十二枚花鳥之図、絹本十二枚横物花卉之図、絹揮毫仰付らる。毎日一枚ツ、落成す。

(明治四年) 一月十五日

朝廷より御用ニテ、絹本豎物四季花卉四枚、絹本十二枚、横物花鳥十二枚仰付らる。
(コノ項、外務省ヨリノ絹本来レルライウ)
外務省より絹本画帖物廿五枚仰付らる。日々揮毫ものにて大多忙。
(コノ項、明治三年末ヨリ明治四年一月ヲ併セ記ス)
三条殿より御襖六枚、

沢様、石山様より御屏風等にて、実ニ繁忙を究

む。

*朝廷(朝廷) *究む(極む)

(明治四年一月) 十六日

笹本幾波氏来り、今般新聞と云もの出来て、何によらず書て日々の出来事を報するので、先

さん切あたまをたゝいてみれば

文明開化の音かする

と加様のものと云。

*加様(斯様)

(明治四年二月) 廿七日

三条様より、襖六枚揮毫御頼みに相成候。武陵

桃源之図。

是よりの日記紛失す。

(明治四年) 十一月十七日

紅葉山ニテ大嘗会御神事二付、市中賑々敷可致様二付、花車など出て賑はし。予も大嘗宮拝見ニ参る。ゆき、すき殿より皆黒木丸太にて作られ実には神代の有さまを拝す。籬は萩にて八重垣を作られたり。此大御写真を陛下御手づから拝借仰せ付られて写し奉る。

*ゆき(悠紀) *すき殿(主基殿)

明治五年

明治五年壬申

(明治五年) 一月十一日

殿様御用召にて任内豎。

(明治五年) 二月六日

和田倉会津屋敷より失火、大風にて。花蹊等ハ
両国中村楼ニ於て書画会ニ会す。正午より火の
手揚げ、其火事之盛なる前代未聞、丸の内より、
通り、銀座辺、皆焼失して、夕景、築地本願寺
も沢家も姉小路もみな焼たり。鉄匏洲迄火来、
鉄匏洲迄逃たり。夜十二時過、神保町石山家え
立逃、暫時石山家に滞在す。
姉小路住宅、神田三崎町ニ移転す。花蹊も同居
す。

(以下、明治六、七年ノ記事ヲ併セ記ス)

京都華族の御姫たち、続々入学申込れ、皆寄宿
す。

万里小路芳丸、同伴子、桃子。

御所宮内卿より御頼みにて、宮中典侍、掌侍の
方々に漢学御稽古ニ参る事、土曜日より日曜終
日、毎年。

青山御所典侍、掌侍の方々え習字御稽古申上る。

*六日(廿六日) *鉄匏(鉄砲) *鉄匏

(鉄砲) *立逃(立退)

(明治五年) 二月廿六日

和田倉よりの大火にて、殊に烈風はけしく、築
地沢家も不残焼出、荷物持出して四度迄逃て鉄
匏津にて止。此火、午十二時より夜十時迄。石
山家え立のき候。

*鉄匏(鉄砲)

(明治五年) 五月廿三日

聖上、西国行幸御発輦、奉送す。

(明治五年) 九月十一日

姉小路公義、陛下之思召ニより独乙留学被仰付、
九月十三日東京出發。
*十三日(十一日)

姉小路公義、予て思召により洋行、独乙留学仰
付られ、本日東京御出發相成候。同行ハ司法卿
江藤真平之筈、俄に止に相成、岸良氏同行致さ
れ候。

*江藤真平(江藤新平)

(明治五年) 十一月八日

朝廷より御用召にて十二時参内す。山里御庭、吹上禁苑、所々拝見仰付られ、内侍所拝し奉りて、梅見の御茶屋ニ参る。御上、皇后様出御の御沙たなから、皇后様成らせられ、拜謁之上、御側にて御席上書画御覧ニ備える。皇様より種々六ツケ敷御好さまもあらせられ、張鼻青竜刀を持たる処、またハ大公望魚つる処など、其外詩書なども大はつみにて、御料理等戴、又結構なる賜ものありて、十時退出す。

*沙た(沙汰) *皇様(皇后様) *張鼻

(張飛) *大公望(太公望) *大はつみ

(大弾み)

(明治五年十一月) 十七日

綾小路正二位様、画の御入門相成。八十一歳御弟子也。京師梅園秀暎、画の入門す。八十二歳也。

(明治五年) 十二月二日

本日より大陽曆に改良す。

*大陽曆(太陽曆)

(明治五年十二月) 三日

此日、明治六年癸酉年一月一日と相改。

明治六年

中山従一位様より御頼みにて、仲子様御寄宿。

明治六年

芝大教院設立、女教院も出来、花蹊、権訓導に補せらる。

桐淵母、娘秋、孫登子、幸子、石山菊子、山田富、平田長子、大谷木豊、飯尾悴娘二人、土御門益子、四辻増子、四辻妹、田中公義娘、及外二入門願来る。池田辰雄。

(明治六年) 一月十一日

万里小路伴子様御入門。

(明治六年) 二月十二日

赤阪大宮御所より御用召ニテ昇殿す。皇大皇后御前にて席書画数十枚御覧ニ備える。御好さまもあらせられ、猛虎をかけと仰せられ、二尺巾絹本に揮毫す。大御満足さまにて、御料理御菓子等戴、御目録及御品物等拝領す。七時退出す。

*皇大皇后(皇太皇后)

(明治六年) 同十月廿五日

皇后宮、皇大皇后宮、御浜離宮へ行啓あらせらる。花蹊御用召にて、中嶋之御茶屋にて拝謁、御前にて書画共沢山に御覧ニ入る。両陛下御慰様にて、一入御満足あらせらる。実天晴朗春の如し。海の景色も殊更にて、午下五時御還啓あらせらる。

*皇大皇后宮(皇太皇后宮)

(明治六年) 十二月九日

朝より生徒試業式、皆書画を席上にて揮毫す。

(明治六年十二月) 十一日

正親町春香姫、田中嶋女入門。

(明治六年十二月) 十二日

正親町鍾子姫入塾。

(明治六年十二月) 廿一日

大岸常盤入門。

(明治六年十二月) 廿四日

独乙人よりの依頼之画十五枚渡す。

明治七年甲酉

*酉(戌)

(明治七年) 二月十一日

万里小路宮内大輔様より御使にて、桃子此度花蹊え養女にもらひ受候事に約定いたし候へとも、通房様英国留学中ニ付御帰朝之上表向にと云事に相成候。

同(明治七年)十一月廿五日

朝より試業式ニ付生徒一同参集、講義及書画を揮毫す。今日迄に入門する華族の姫たち八十余名に達す。日々入門を乞ふ者織か如し。

明治七年六月十九日

此頃、生徒之数もふえて、とても姉小路の家屋

拝借いたしても居られすとて、[神田中猿町十三番地](#)二所買得す。山口県天野御氏氏之所有地也。
*明治七年（明治八年） *神田中猿町（神田中猿楽町）

（明治八年） 七月十日
中猿楽町十三番地地券状請取候也。此日より地ならし、学校建築二取かゝる。

（明治八年） 八月十四日
塾上棟式執行す。

（明治八年） 九月六日
宮内御内儀より御頼みに相成、典侍様、内侍様、夕顔権典侍、早蕨権典侍、花松権典侍、芙蓉内侍、杜若内侍、玉椿内侍、楓内侍の方々、漢籍講読御稽古に参る。土曜より日曜毎々参る事と定む。

明治八年

*明治八年（明治九年）

（明治九年） 一月八日
昨暮より学校建築、落製二付、八日吉辰を以て開校式執行す。華族の方々姫方等も来賓之多き実に驚入たり。これより跡見女学校と称して、女子教育に従事する。国語、漢籍、算術、習字、絵画、裁縫、琴、插花、点茶之九科目とす。

明治廿七年三月廿三日

法帖揮毫之數一万に達す。此時、一万帖之祝賀会を催す。三条様御簾中も成らせられる。

明治四十五年三月迄、惣計老万七千九百七十四冊也。